闘いのその先は

ガイア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
闘いのその先は

【Ｎコード】
Ｎ０７７５Ｚ

【作者名】
ガイア

【あらすじ】
巻き込まれていく。それはゆっくりと世界の時間の流れを逆らうかのような激しい戦いに
誰もが嘘だと、冗談だと願ったが非情にも戦いは激しさを増していく
平凡の主人公が何気ないきっかけでこの戦いの中に巻き込まれた

「守りたい……、ただそれだけだ！！」

友達、新たな出会い、戦い、、企み、現実。様々な感情や思いが向かうその先は……

補足。チートになりそうな予感がしますので苦手な人は逃げて下さい（＾p＾）

※「あなたは大切な人がいますか？」からタイトルを変えました…………

衝動的に書いてしまいましたが、こちらも頑張って書きたいと思います＾＾

誤字脱字がありましたらすみません＞＜

壱（前書き）

最近寒いですね…皆さん風邪を引かないように対策しましょう＾＾

壱

いつもの日常、朝起きてご飯を食べて学校に行き授業を受ける繰り返される平和な日常。暖かな陽気に窓際の席に座っている柳村はうとうととしていた

「おい、おーい……柳村ー次授業始まるべ」

「ん、うーん……眠いな」

柳村はまぶたをこすり前の席に座っている友人に顔を向ける

「次ー何？　雪ー」

「数学だけど」

数学かと思いぐ、と背筋を伸ばすと携帯が光った。携帯を開くとメール一件

「んー？　迷惑メールかこれ」

件名は無し。本文にはたった1行書かれたメールだ。名前は名無しでアドレスも表示されていないので誰から来たのか分からない。通常名前無しのメールなんて有り得ないのに何故俺の携帯に？

「何、どうした？」

携帯をずっと見つめていたせいか雪が不思議に思ったらしい。俺

は携帯の画面を見せる

「どう思う？　悪戯にしては、アドレスが表示されてないのが気になるし……」

「確かに……でもこれどう言う意味？」

『あなたの大切な人は誰ですか？』

二人共？マークが頭に浮かんでいる。柳村は試しにクラスメートと書くことにした

「悪戯だったら、俺達のクラスメートが誰だが分からないだろ？」

「確かに……でも危なくないか？」

柳村は何か言おうとした時にチャイムが鳴り響いた。数学の授業だ

「ま、後でまた考えようぜ」

「そうだね……」

同じみのチャイムが鳴り響いた。生徒達はみんなざわつき始める

「ああ……終わった」

「ちゃんとプリント書いた？　……やっぱり書いてない、ちゃんと書かなきゃ駄目だよ」

雪の言葉に相づちをうつと携帯を開きメール画面を開く

「じゃあさっき言ったとおり、クラスメートって書くからなー」

「まあ、クラスメートって書かれても学校が沢山ある日本で柳村のクラスメートを特定する奴はいないないだろうね」

画面にクラスメートと書き送信する。数秒固まっていた二人は何事もないことに安心してホッとした

「ほらな、やっぱり悪戯だよ」

「うん……でもなんだろう、胸騒ぎがする」

緊張してそう感じているだけだと柳村は言い雪はもやのかかったようなすっきりしない気分で次の授業が始まっていった

壱（後書き）

さて、次も頑張って書きますか、、

弐（前書き）

寒いと朝起きれなくて寝坊しちゃいますよね＞＜

空想が文章になった…！

弐

　あの変なメールから数日経過しても何も変わったことはなかった。そう、あれはただの悪戯メールだと思い込んでそのことをすっかり忘れていた今日の午前中

　携帯のマナーモードがポケットの中で震えている。サイトのメールだろうかと思い開いてみると柳村の心臓が早鐘を打つ。生唾をゆっくり飲み込む

『○○高校、２年３組のクラスメートを大切な人としました。柳村様には、これから大切方々を御守りする為に戦って頂きます。敵を倒せば倒す程新しい力がお使い出来ます。万が一負けた場合は大切な方々と柳村様はこの世界から存在が消えますのであしからずご了承下さい。柳村様の最初の力は素早さです』

　目眩がする。あのメールは悪戯ではなかったのか、それよりもこんなことになるなんて思いもよらなかった。柳村はメールにクラスメートと書くんじゃなかったと後悔するがそれはもう終わったことだ

「雪に……まずこれを見せなきゃ」

　ちょうど休憩中の時席を外していた雪を探そうと立ち上がった瞬間ビリビリと肌が痛くなる程の殺気が身体を襲う

　恐る恐る振り返ったがそこには誰もいない。ホッとしたのもつかの間クラスメートの誰かが突然叫んだ

『きゃああ！』

勢いよく振り返ると女子生徒の腕に刃物に切られたかのような傷が出来ていてじんわりと血が服からにじみ出ている

「あ、うぁ……なんで」

柳村は頭が真っ白になり、ただ此処から逃げたいと思った時には身体は勝手に教室から逃げ出していた。突然の出来事に頭が追いつかない、気づけば柳村は屋上にいた

必死に走っていたからか、汗だくになっており冬の風が身体の体温を冷やしていく

「はあ、はあ……なんなんだよこれ……！」

「大切な人を守る為の戦いだろ、お前の大切な人は誰だ？」

柳村は呟いた瞬間誰もいないと思っていた屋上から返答が返された。吃驚して後ろを振り返ると屋上を出るドアの近くから男が柳村に向かって歩いて来る

「だっ誰だよお前！」

「そんなこと、どうだっていい。大切なもんを守る為に戦って貰うぞ！」

男は腕を振り上げると木刀より少し大きい刃が付いている剣を何もない空間から現れた

「なっ何それ、えってか本当に戦うの！？　俺武器ないんだけどっ」

「問答無用！　あいつを守る為なら俺は命をかけれるっ」

体勢を低くして男は柳村に向かって走って来るが柳村は未だに事態が現実で起こっているのかと混乱中なのであった

男は一気に間を詰め懐に入ってくる。柳村は一瞬呆けたがギラリと光っている剣を見て柳村は反射的に後ろに下がった

ひゅんと柳村がいた所に剣が空振りした。あの一瞬後ろに下がらなかったら柳村の胴体は上下お別れしていただろう

「……っうあ！」

「ちっ逃げるな！　倒されろっ」

男は大きく剣を振りかざし柳村を切ろうとする。反射的に剣をよけつつ柳村はこの状況の打開策を考えていた

「（どうする、今俺に何が出来る……！？）」

一瞬動きが止まっていただけで腕の服が破れ血がにじみ出ている

「ちっ動きが素早いなお前！」

柳村は男が呟いた言葉に気付いた、自分が最初に貰った力のことを

「（打開策は……ある！）」

攻撃の力ではないが、相手が疲れるまで避けきればいいこと。そう考えて柳村は相手の体力がぎりぎりの所まで避け続けることにした

弐（後書き）

超能力が欲しい……、、

参（前書き）

戦いに否が応でも死はつきものだ。戦いに勝つということは相手の命を背負うことだと私は思っている

次行ってみよー！

参

「はあ、はあ……ちょこまかと逃げやがってっ」

「いってえ！　また掠ったああっ」

じわじわと太ももを掠った傷が痛いと身体が訴えている。この会話を一時間ぐらい続けているだろうと柳村は思う、多分

男は最初は余裕だったのと比べて今は汗だくになり剣を振り回しているのだ。荒い息を二人共吐きながら睨みつづけている

「くそ……もう力を温存するとか関係ないっくたばれええ！！」

余裕が無くなって注意が散漫になっていたのだろうか、男は一気に間合いを詰めて剣を大きく振りかざす

「そこだあああっ！」

柳村は足に思いっきり力を入れ男の懐に入り込み拳に力を込めて思いっきり殴った

スピードもあったせいか、殴った後男は数歩下がり膝をつく

「ぐ、くそ……っ」

「はあ、はあ……悪いな」

柳村は男の手から落ちた剣を掴み男の目の前に立つ。男は腹を押

さえ憎々しげに柳村を睨みつけている

「お前なんてすぐに殺せた筈なのに……！　運が良かったなっ」

「いや、俺もぎりぎりだったから……あれ？　これってどうやって勝敗決めるんだ？」

男は呆れ顔になる、こんな奴に負けたのかと思うと情けなくなった

「殺すか殺されるかデスマッチの戦いだろ、俺を殺せ。先程ので体力はもうない、俺の負けだ」

「俺が……お前を殺すのか？　いや、無理だろっ俺は普通の学生で殺しなんて……っ!?」

男は微かに笑うと誰かの名前を言い、柳村が持っている剣を使い自分の身体を貫いた

「ごめ……んな……あ、き」

「う、うわあああああ!!」

ぐにゃりと身体を貫く感覚が手に残る。すると急に男の身体に異変が起きた

血が剣を伝う。男の身体はだんだんと薄くなり消えていった。残るのは血がついた剣と人を刺した感触

「なんで……お前大切な人を守るんじゃなかったのかよ!?　お前が死んだら大切な人もこの世界から消えるんだぞっ……！」

柳村は膝をついて男がいた場所を触るが冷たいアスファルトの冷たさしかない

柳村は今更この戦いに本当に巻き込まれたのだと実感する。大切な人を守る為に死ぬ気で戦わなければならないこの戦いに

「……この剣は消えないのか。この先あいつみたいに戦いを強制された奴と戦うなんて……っ傷を付けられた女子は！？」

柳村は教室に行く前に剣をどうやってしまうか悩んでいると剣はパッと握っていた手から消えてしまった

「あ、あれ？　まあ良いか、教室に行かなきゃっ」

柳村は走って教室に戻るともう授業が始まっていて、勢いよくドアを開けた柳村に視線が集まる

『……お前なー、今更授業に来たって遅いぞ？　二時間もサボって何してたんだ？』

「おいっ傷大丈夫か！？」

先生は後回しにして柳村は腕を傷付けられた女子生徒の机に近づく

『えっ……えっ？　傷って何のこと？　柳村どうしたの？』

「へ、だっ……だって腕に傷が……ない？」

女子生徒の腕を確かめたが服も刃物で傷つけられた様子はない。

それどころか女子生徒は傷つけられたことをなかったかのような顔をしている

『……柳村先生を無視するとは良い度胸だ、プリント五枚明日までにやってこい！』

「ええっ先生それは横暴で……はい、すみませんでした」

刃物を持った男より先生に睨まれる方が怖いと感じた柳村だった。
渋々授業が終わった後にプリント五枚を貰いに行ったのだった

授業が終わりプリントを取りに帰った柳村は席に座ると、疲れがどっと出てきたのかうつらうつらと眠そうに瞼を閉じるが授業が始まるので頑張って瞼を開けている

「……大丈夫？　柳村凄く眠そうだけど……二時間もどこでサボってたの？」

「あー雪久しぶり……俺は頑張ったようん、頑張った……」

雪は首を傾げるがいつの間にか柳村は瞼を閉じて眠っていた

ガツンと頭を殴られたかのような痛みが頭を襲う、怒声が耳の近くで聞こえて柳村は耳を手で覆うと怒声は一旦止まったもののまた先程と同じ痛みが身体を襲う

「……柳村、起きろ殺されるぞ」

「っ……！」

ガバッと顔を上げるとそこには般若の顔をした先生がいました

「私の授業で寝るとは……柳村、前の授業二時間もいなかったそうだな？　昼ご飯を食べて昼寝して……学生の分際で勉強を放棄するんじゃない！！」

「すすっすみませんでした女帝様っ！」

ガツンと柳村の頭を殴られる。褒め言葉で言ったつもりなのに、何故女帝に怒られたのか分かっていないようだ

昼ご飯を食べ損ねた柳村は授業中お腹が鳴りながら授業をしているとまた女帝に怒られるのだった

放課後、騒ぎだす教室に柳村はプリントの数を見て青ざめていた

「……はあ」

「柳村今日はどうしたんだ？　おかしいぞ？」

雪が話しかけてきたが柳村は喋るのも無理そうだ。女帝の授業が終わった時放送で呼ばれプリントを十枚を明日中にやるように言われたのだ

「俺守ったのに……めっちゃ死にかけたのに」

「柳村何を言ってるの？」

柳村は静かに携帯のメール画面を雪に見せようとしたが、目を見

張る。そこにはあるはずのメールはなかった
「……やってやろうじゃん、守り続けてやるよ！」
「柳村？」
柳村は雪に言おうとしたが、ふと考える。雪に言ったら雪まで戦いに巻き込まれるのではないかと
「うん、……帰ろうぜ」
「……柳村何か言いたそうだけど言えないなら無理に追求しないけどさ、親友の俺ぐらい気をつかわなくて良いんだぜ？」
柳村は軽く笑い鞄を持って教室の出口に行く。雪も鞄を持ち家までの道を寄り道しつつ帰って行った

参（後書き）

存在が世界から消える。それはその人間に関わってきた人間達の記憶からその人間との思い出が消えるということ

戦いに勝つ人間だけはその人間と戦った記憶が消えない。周りからその人間の記憶がなくなっても

次行ってみよー！

四（前書き）

今回は長く書いてみました＾＾

四

初めて戦った日から数日経過するがあれから何度も戦いになる度に相手を説得したが結局殺し合いになる。戦いでクラスの友達が殺されても勝てば友達が殺されたという事実はあたかも初めからなかったということになっている

ある時は友人を人質に捕らえて殺す人間もいた。その度に柳村は涙を流して相手を殺す。やらなければ自分もみんなも死んでしまいという重たいプレッシャーがだんだん身体を蝕んでいった

「はあ、はあ……勝った」

「嫌だあああ！！」

相手が手を伸ばすが身体は消えていく。柳村はさっと目を逸らした、何回でも慣れないこの光景。身体に相手の力が備わるのを感じる

「いつまで続くんだこの殺し合いは……」

人間を殺す度に血の匂いが身体に染まっていくのではないかと柳村は思う

「柳村……なんかやつれてない？　大丈夫？」

「ん、大丈夫心配するな雪」

雪に笑いかけると一層柳村を心配する様子で話しかける。少し前

から疲れている表情をしていて、ついに今日聞いてしまったけれどこの様子

何故親友の自分に何も言ってくれないのかと日に日に思うようになった

「はぁ……（今まで何人も倒して力を手に入れて戦いやすくなったはいいけど流石に狙われすぎだろ俺）」

柳村は小さくため息をつく。最初はまばらだった対戦相手が近頃急に柳村を襲うようになり始めた。おかしいなと思いつつも力を使い相手を倒していく

「柳村、帰りにさ学校の近くのコンビニに行かない？」

「ん、そうだなー飲み物買いたいし」

雪はほっとする、最近柳村は二人で一緒に帰らなくなった。本当は、雪を戦いに巻き込みたくないという思いで下校はなるべく一人で帰って行ったのだが、雪は柳村の思いなんて知らず柳村に知らない間に嫌な思いをさせて避けられているのではないかと考えていた

「いらっしゃい……いらっしゃいませー」

コンビニに入るといつもより中はすいていた。店員は柳村をチラチラと見ていることに雪は気づく

「何買おうかなー」

「ねー（柳村のこと好きなのだろうかぁの店員）」

二人は適当にお菓子や飲み物を手に掴み会計に向かう。柳村は前に一人の客がいる所に並んだ。先程チラチラ見ていた彼女の所ではなかったのだが、彼女は柳村の前の客が終わると無理を言って変わってもらっていた

「いらっ……しゃいませ」

「……」

特に顔を合わせることもないと思っている柳村は会計の間他の商品を見ている。彼女は頬を赤らめチラ見しつつ会計を終わらせた

「全部で４５０円です」

「ん……と」

財布の中に手を入れ小銭を渡す。ぼーっとしていたせいか店員の手の上で数秒固まっている

「あああ、あの……っ」

「え？　あっすみません」

パッと手を離す柳村の手を店員は名残惜しそうに見て会計を終わらせた。雪はもう会計が終わっていて雑誌を読んでいる

「終わったー」

「おー、帰るか」

たわいもない話をしながら柳村達は帰っていく。ただ一人そんな柳村達をじっと見つめる者がいることにまだ二人は気づいていない

クラスメイトの一人矢田が違和感を感じていた。矢田は男子にしては珍しく毎日の出来事を日記を書いている男子だ

だがここ数日自分が書いた日記がおかしなことなっている。見覚えないことばかり書いてあるのだ。例えば学校の近くで切り裂き魔が出たとか放火魔が出たとか、はたまた地震で校舎が崩れたとか

どれも見覚えないことばかり、だがこの日記は矢田しか知らない場所に隠してあり誰かが書くということはまず有り得ない。そもそも日記に見覚えのないことを書いたって誰が得するだろうか

「でもここに書いてあるからには本当にあったことなんだろうな」

知っている筈なのに知らない、ここ数日のテレビのニュースだってこの出来事を放送している所はない

「そうだ〇ｗｉｔ〇〇ｒをやって何分おきに何かあったら書けば分かるんじゃないか？」

そう思ったら即実行するのみ、矢田は面倒な手続きを済ませログインをする。勿論何故これを始めたのかも初めに書いた

「よし、これで分かるだろ」

矢田は日記をしまい、明日の授業の教科書を鞄につめて寝ることにした

学校、いつもの授業にいつものみんなの顔ぶれ。そんな日常にある出来事が起こる

『えーっえりと高橋君付き合ったの！？』

『なん……だと。えりたんは俺が狙ってたのに！』

『ちょっお前キモイぞー』

『ははははっ何を言う、元から俺はキモイぞ』

『え……なんかごめん』

『えっ謝れたら……俺、俺……！』

などという異性が付き合うだけでもこの騒ぎ。そんな中、柳村はパンをかじりながらクラスの光景を眺めていた

「平和ってやっぱりいいな」

友達が当たり前に生きて喋って戦いも知らない日本でこの先何も起こらなければ普通に恋をして結婚をして平和に生涯を過ごすのだろうと柳村は思う

「だから……」

だから柳村はこの平和な日常を守る為に戦うのだと改めて決意をする。どんなに自分が傷つけられようとも何も知らないクラスメイトだけは守り通したい

「柳村君、あの……知らない人が呼んで来いって言われたんだけど」

「分かった」

廊下に出ると明らかに学生ではない人間がいた、周りは普通に通り過ぎて気付いている様子はない

「……結界か？　それも周りと同じ服を着ていると思わせる幻覚か？」

「両方当たり、やはり噂は本当のようだ。強い能力使いがいるというのは」

ニヤニヤと厭らしく笑う人間を見て柳村は顔をしかめる。すると男は一枚の写真を柳村に渡す

「……っゆ……雪に何しやがった！！」

「それはなかなか良い声で鳴くな、御陰様で楽しませてもらったよ」

頭が真っ白になる。周りの音が遮断され男の酷く歪んだ顔を睨みつける、殺意を込めて

「戦おう。今すぐに」

「ひひ、良いのか？　周りの人間を巻き込むぞ？」

柳村の眉間がピクリと動く。確かにこの場所は学校ですぐ後ろは自分のクラスだ、だが戦いに勝てばいいこと。勝てば倒れた友達は蘇るのだから

「関係ない。雪をこんなふうにしやがったお前は絶対に許さないからな」

「よろしい、ならば戦おう」

一体何が起こったのか分からない。だが矢田は教室の端で巻き込まれないようにこの状況を〇ｗｉ〇〇ｅｒに書き込んでいる

「なんで、なんで柳村があんな物持って戦ってるんだよっあいつ誰なんだ!?　これは本当に現実なのか？」

耳障りな音が廊下から響く。剣が何かをはじく音や爆発音が教室を揺らす。みんな教室の隅に集まって泣き出す人やまだこれが現実なのか区別つかない人がいる

「うおおおお！！」

「そんな攻撃効かないね。君は色々な能力を持っているが流石に結界能力を持った人間と戦ったことはないだろう？」

キィンと剣が結界を跳ね返り、だんだん刃がかけていく。何度結界を攻撃しても奴はニヤニヤとした顔で柳村を見てるばかり

これでは体力を消耗して危ないと悟った柳村は剣に水を纏わせて結界を切る、がやはり結界は亀裂すら入らない

「ふふ、今回も僕の勝ちかな。早く体力切れろー」

「っうぜえええ！！」

柳村は今持っている能力を全て一点集中して攻撃をする。爆風が柳村を襲い廊下の所々を破壊する

「っ……ふうん？　少しはやるね、結界にひびを入れるなんて。なら僕もそろそろ本気だそうかな」

「はあ、はあ……本気だと？」

男はふっと結界を消すと手を上に向け、死に神の鎌のような武器を出した。柳村は密かに戦慄をする

「さあ、始めよう。楽しい戦いを僕に見せてくれ」

「ふん、……俺は許さないからな。雪をあんなことしやがって！」

男はくつくつと厭らしげに笑う。隙だらけだと思い一歩踏み出すが、ひやりと首に悪寒がして柳村は反射的に屈んだ

「おしい、何故避けるのかな。そういえば君が先程から雪雪と言っている人間は実に切り裂きがいがあったよ」

「……っ」

あのまま柳村が進んでいたら今頃は首無しだったろう。鎌一振りでこれほどまで距離が縮まるなんて思ってもみなかった

掲示板がある壁に廊下から刃物が出てきた時には皆息を呑んだ。煩かった人達も刃物が廊下に戻る所を静かに見つめている

先程と違って今度は何かが壊れる音が廊下から聞こえてくる。たまに刃物がドアから突き出ることもあった

『いやああ！　何が起きてるのようっ』

『夢だこれは夢だ……そうだここは二次元の世界なんだな！』

『お母さん……お父さん……』

「おかしい……こんな出来事初めてじゃない気がする。前に……？いや、どこで……あ、今はこれを書かなければ」

震える指で携帯をうつ。ガシャンガタンと廊下かから聞こえ他の教室から悲鳴が聞こえた

「これは本当に現実なのか……？」

赤い血が滴る。じくりじくり痛みが増していき赤いシミが服を汚す

「……能力を持ってもその力を使いこなさないと僕には勝てないよ」

「は……あ、はあ……」

柳村は自分の手を見る。圧倒的に此方が不利なのに柳村はニヤリと口元を上げた

「……？　何その顔、何か秘策でもあるのか？」

「いいや、秘策なんてものじゃない。無謀な賭さ……絶対一週間筋肉痛になるからやりたくないんだけど仕方ない」

ため息をつくと柳村は相手を睨みつける。男も、柳村の目がまだ死んでいないことに気づくと楽しそうに笑った

「……スティップリガーっ！」

「はっ何だその名前はっ」

一瞬の出来事。柳村は脚力に力を込め、床を全力で蹴って奴の懐に入り込み心臓の場所に手を当てるとすぐに距離を取って離れた

「絶対一週間筋肉痛とか……嫌だなぁ」

「一体何をした……？」

男は呆然と柳村を見るが、柳村は気にした様子もなく身体の傷を確認していた

「ああ、そうだ。これ言ってみたかったんだよねー！　お前は既に……ってあーっまだ消えちゃダメっまだ台詞の途中なのに！」

「寒い……身体が消えていくだと？　この僕が……お前本当に何を

したっんだ！！」

奥歯を噛み締め柳村を睨みつけるが、柳村は真顔で奴を見つめた後消えていく姿から顔を逸らした

「さようなら。雪を苦しめた罰だ、どうやってお前を倒したなんて言わない」

「……っ……！」

男が消えると柳村にぐらりと激しいめまいが襲う。壁に寄りかかって瞼を閉じて数分経過すると耳にはいつもの教室の賑やかな声が聞こえる

「勝った……今回は流石にヤバかったな」

ずるずると床に座りこんでいると目の前に探していた人物が現れた

「雪、久しぶり。どこに行ってたんだよ」

「職員室だけど……柳村？　何かあったの？」

柳村はとっさに怪我をした所を見たが怪我はなく服には何も切られた後はなくホッと安堵した

「教室戻るか」

「うん？　良いけど……無理しないでね柳村」

雪に笑いかけゆっくりとした足取りで教室の中に戻って行った

四（後書き）

眠くて辛い…さて、 また一週間書けなくなるぞ><

PDF小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0775z/

闘いのその先は

2011年12月17日09時49分発行